

医芸歌壇



八月

東京 小松安彦

立秋の夕べに聞けり公園の今年最初のつくつく法師

熱帯のハイビスカスの咲きてゐる路地歩みをり暑き日の宵

桃色の蓮の苔と十四日月を眺める処暑の夕暮れ

盆踊りの歌声を聞きこぼろぎの声を聴きつつ仰ぐ満月

木星と下弦の月を見てをれば東の空に昇るオリオン

暑き夏

青森 秋 霧 朝 光

暮れゆけば淋しさつるる夜ごとに明日に希望をだいて眠らん
郭公の声に目覚めて暁の空におぼろな半月仰ぐ

暑き夏思いおこすは幼らと汗を拭きつつ芋を掘りし日

整然とひばの厚木積まれて木場にその香の満つる親しさ
はらからぬ縁も淡句なりゆくか甥の婚儀を人づてに聞く

痴呆の林

東京 田 村 豊 幸

痴呆症オーケイオーケイとあつい日に誰を呼んでる午前も午後も
蟬の穴痴呆出て来て入る穴そなことなどフト思つ夏
リハビリの名目入院したけれど右も左も口あけ痴呆

意識あるないの不明の長命者手足引つぱるこれリハビリと言つ
リハビリの前の処方をフト見ればまい・ふらつき・多副作用かな

安房鴨川

千葉 蒲 谷 玲 子

五浦浜

東京 初 芝 澄 雄

胸ゆする波音絶えず波頭の白きレエスは翻りゆく

三度揚げし曾せざるぬ堅き目玉を残し

沖のかた釣り舟一つ一文字日の出に向かい航線を引く

日の出浴び漁に出づるは生業かそんたつを少し羨む

浜に立ち日の出見つめし人々の心にも陽の昇りたるらん

荒磯に碎け散る波望みつつ船いだしけん天心思う

岩を嘔み白波碎く五浦浜御堂の下に激浪寄する

秋雨に濡れし岩肌黒々と五浦浜に激波で寄する

天心の昔の夢を残したる六角堂に寄せる荒波

松風や五浦浜を吹き渡り天心の夢語りで過ぎぬ

定年哀歌余情

東京 林 宏 国

フィンランド寸描

神奈川 武 井 忠 夫

勇退せむ老校医とし振り返る三十六年なほ未練あり
身障の学童のいのちあづかりて長くもあらぬ三十六年

PTA会長とても若き母手渡し呉るる感謝のブーケ

産業医に校医かけもち嘱託を務め終へしも老諾へず
校医退きてもの足らなくもゆとり持ちて地域医療に捧げむか

一生

盛 夏 荻城 羽 生 藤 伍

同窓会ノンアルコールと並の酒互角にならび賑わいにけり

夕暮の散歩に出るも風微温く犬の足許囁熱からん

真夏日や街の樹の枝少し揺れ湖畔は涼しき南風やまず吹く

わが町は白鷺の郷初秋の稻刈りし田に集まりて来る

青鷺は丈高くして広き田に哲人のごと孤立して立つ

鳩 杖 東京 横 田 英 夫

牟寿越え生老病死は傍らにひたと寄り添う影のごとくに

牟の字は験が悪しと思い居り卒倒卒中卒去等々

牟の字を忌みしと知りて息子等は鳩寿と変えて杖贈り呉るる

贈られし杖の握りのつやつやと赤桜色に光るを見つむ

杖無しで歩けぬ程にも非ざれば握りて歩む警棒のこと

酷暑続く夏の最中に北欧の清けさ求め巡り辿れる
(ハーメーンリンナ近郊)

見はるかす森の緑と静もりて湖澄めるアウランコ公園

満天を茜に染めて燃えるがに海面耀うボスニアの海
(チーンタリ/スパ・ホテル)

糸車や刺繡女性の民族衣装に時代立ち返り泰西画めく
(ナーンタリ/博物館近郊)

空青く白亜も淨き大聖堂に緑のドーム並び立ちたる

(ナーンタリ/博物館近郊)

前号で「短歌会」開催の打診をいたしました。積極的な参加者募集中ではなかったので、応答がありませんでした。時期は正月を過ぎ、暖かくなつてからと考えますが、いかがなものでしようか。

冬季号に寄稿される際、△出席あるいは欠席▽作品だけ参加——のよう、ご連絡ください。
(編集部・α)